

資料館だより

企画・編集 国立ハンセン病資料館

発行 公益財団法人
日本財団

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13

電話 042-396-2909

FAX 042-396-2981

URL <http://www.hansen-dis.jp>

いまは亡き友を偲ぶ 国立ハンセン病資料館館長 成田 稔

入所患者に限らず、人は誰しもある隔離状態に置かれると、何となく優しくなるようで、そこに共感すると離れにくい親しみを覚える。私は、療養所で一人ぼっちというわけではなかったが、全生園の医局の中では孤立していた。三川某という韓国人の患者も、いつもひとりだった。日本語は「バツカヤロー」しか知らないのではと思うほど、何かあると怒鳴っていた。酒とパチンコ(?)が好きで、夕方に会おうと(待ちかまえていたのかも)、「千円貸せ」が口癖だった。二、三時間も経つと、園長室の窓を叩き、顔を出すと酒臭い息といっしょに、「食え」と菓子パンを1コ差し出した。翌日は外来治療棟の入口に立っていて、何も

言わず帽子を脱ぐので中を見ると、千円入っていた。

園長室の窓から立ち去ろうとするとき、あまりフラフラしているようだ、彼の居住舎まで送って行ったこともあった。もちろん話し合うようなことは何もなかった。ある晩、道が白く見えるほど月が明るかった。突然「サビシイ」とつぶやくように言った。故国の何を、誰を月影の中に見ていたのか、あとは彼も私ただ黙々と歩いていた。彼は多分私が、幼い頃と成人する少し前に、北朝鮮にいたことを知っていたのかも、ただそれを話題にしたことはない。

そんな三川某の保護者として、陰に日向に面倒を見たのが佐川さんだったとは、ずっとあとに聞いた話だった。た話だった。佐川さんを知ったのは、転落事故による受傷時の関わり(結果的には自然治癒)だが、以来五十年ほどと付き合いは長い。私が北朝鮮で育つたと知ってか、いつのころからか、互助会(韓国人の親睦団体)の集まりに佐川さんに誘われた。改まった挨拶をした記憶はないが、歌を唄うように言われた。ヤレヤレと思っていたら、女性たちが私の周りを囲んでくれたので、口を動かしているだけで済んだ。こんな付き合いだったので、佐川さんとはしんみり話し合った記憶がない。しかししたつた一度だけ、印象的なやりとりがあった。

それは大島青松園に行く高松からの船に、偶然乗り合わせた時のことだ。そんなことをすると入園者の不評を買うという注意だった。そんなことといつても大したことではないので、別に言い訳をするでもなく黙って聞いていた。しかし私(園長)への直言であり、齒に衣着せぬ言い方だけに胸を打たれる思いでいた。このとき佐川さんは、高松宮記念ハンセン病資料館の開館に向けて、資料収集に行くところだったのかもしれない。このあと間もなく、資料館二階の展示作業が始まったのではないかと。これは後日聞かされた話である。高松宮の遺品を展示する経緯は知らないが、妃殿下の御付女官らに展示ケース二面を要求されたらしい。それに対して佐川さんは、断固一面のみと主張して譲らず、とうとうこれを押し通した由である。この話を聞いたとき、すぐ青松園に行く船中なのが思い浮かんだ。多分佐川さんは、女官らに断る理由をあれこれとは述べなかつたろう。それでも断りを言う思いのウラには、日本が国家施策として強制的に進めた隔離の犠牲、その実態の無残な結果と、その苦境に己を鞭打って闘いを挑み、文学や芸術の分野に広く名を残した人びととを、後世に広く伝えたいという願いを強く潜めていたろう。



追悼 佐川 修さん

当館における佐川修さんの経歴

- 1990年 高松宮記念ハンセン病資料館設立準備のためのハンセン病資料調査会専門委員(東部ブロック代表)。
- 1992年 高松宮記念ハンセン病資料館建設促進対策委員会の資料収集・展示対策委員会小委員長。大竹章さんと全国の療養所を回り、協力要請と資料収集を行う。
- 1993年 開館。以後25年間、語り部・運営委員として、また毎日の実務で活動を支える。
- 2002~04年 資料館拡充のためのハンセン病資料館施設整備等検討懇談会参加者。
- 2007~18年 リニューアル後、ハンセン病資料館等運営企画検討会参加者。
- 2018年1月24日午後12時3分 逝去。

資料館が開館した一九九三年から八年を経て、二〇〇一年に「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」の熊本地裁一審判決が確定した。それを受けた内閣総理大臣談話は、名誉回復のための措置として、「ハンセン病資料館の充実」と「名誉回復のための啓発事業」とを謳っている。いつも文書類の作成に余念のない佐川さんの姿を思いながら、資料館の更なる進展を誓う。

佐川修さんとの思い出

黒尾和久

佐川さんと一度だけ、一緒のお部屋で宿泊する機会があった。二〇一四年五月に草津で行われたハンセン病市民学会の「重監房」に関する交流集會に二人で登壇したときの事である。

シンポジウムでの佐川さんのお話は、ライフヒストリーを交えながら、「重監房」に食事を運んだ体験を生き証人として語る、じつに迫力に満ちたものであった。

前日に神さんの突然の訃報に接し、全生園自治会長としての対応もあつたはずで、何もおっしゃらなかつたが、ほとんど寝ていない状況での草津入りであつたに違いない。それなのに、いやそうだからこそ、いつも増して太く、よく通る声での迫真のお話であつた。夕方のレセプションで、「あんまり飲みすぎてはいけないけどね」と健康のことをちよつと気遣いつつも、佐川さんは、大好きなお酒を楽しんだ。きつと緊張がほぐれたからであろう。さすがに疲れが浮き上がってきたのか、宴席半ばで「そろそろ戻ろうか」とおっしゃった。長い廊下を二人でゆつくり歩いて、部屋に到着すると、「もう寝ようかな」と言う。「そうですね。明日もありますしね」と、

温泉にもつからないで、身支度をし、並んで布団に入った。佐川さんが隣りに寝ているのだと思うと、なにか嬉しいような心持ちであり、また寝言やいびきで安眠を妨げてはいけないと心配でもあり、なかなか寝付けなかつた。

しばらくすると佐川さんが寝息を立て始めた。すごく静かな、聞き耳をたてないと聴こえないようなジェントルな浅い息づかいであつた。夜中に何度も何度も目が覚めた。佐川さんの寝息は優しく変わらなかつた。佐川さんは、毎晩毎晩こんな風に眠つて、次の日の仕事に備えてきたのか、と勝手なことを思うと胸がしめつけられた。

次の日、佐川さんに、恐る恐る「よく眠れましたか」と聴いてみた。「ぐっすり眠れたよ」と、ちよつとはにかんだような笑い顔で答えてくれて、続けて「今度、みんなであら川に行こう」と焼肉に誘ってくれた。佐川流の労いの言葉が沁みだ。資料館のことを、職員のことをいつも考えてくれた佐川さんであつた。もう一度あの寝息を感じてみたかつた。合掌。

金貴粉

佐川修さんは一度、高松宮記念

ハンセン病資料館時代、就職したばかりの私に展示室を案内してくれたことがあつた。陶芸が展示されているコーナーにさしかかった時のことである。佐川さんは、「ここに展示されている邑久光明園の陶芸作品は朝鮮の人が多いんだ」



と口を開いた。「この人もこの人も朝鮮の人」と、日本名で書かれている作家名と作品を指しながら私に教えてくれた。その時の少しはにかみながらも、どこか誇らしそうな表情は今も忘れられない。多くの人が持つ佐川さんの印象

は、口数は決して多くはなく、実際に仕事をこなす姿であろう。

しかし、資料館の活動の中でも大きな柱となってきた語り部活動での語り口は、普段の無口な姿とは違つて熱意をおび、情感豊かなものであつた。

この語り部活動は、開館後まもなく佐川さんと平澤保治さんが始めたものだ。佐川さんは「やつぱり自分たちでちゃんと説明するという役目をしないとだめだ」とする平澤さんの提案に「一人じゃ続けられないから、半分自分がやるようになった」と振り返っている。以後長年にわたり、来館者への講話だけではなく展示室の案内も行っていった。リニューアル後もその活動は続けられ、多くの来館者にハンセン病患者・回復者の歴史を伝えてきた。リニューアル準備のため仮事務所で資料館業務を行っていた時も、佐川さんは団体対応の一時休止を渋り、忙しい中でもその一室で語り部活動を行っていたことが記憶に残る。

佐川さんは資料館を作るため、大竹章さんや他の入所者等と共に全国をまわつて資料収集を行い、一から展示を作り上げた。資料館を作るうとした理由について「多くの人に理解してもらうには、博物館がよいのではないか。また交流の場にもできる」ということをかつて語っている。

病棟での生活を余儀なくされた後も時折車イスで訪れてくれた。佐川さんは多くの方が訪ねてくれ

る資料館が本当に好きだつた。私にかつて語ってくれたように、多くの来館者に資料や語りを通してここに生きていく「人」を伝えたいと思われていたのではないか。今後もどうか見守り続けてほしい。

西浦直子

朝、給湯室で佐川さんの湯呑みを見る。持ち主が亡くなつたという実感が湧かない。

初めのうちは、少し近寄りたさを感じた。でもだんだん、堅実なお仕事ぶりはもちろん、たまに披露される茶目づつと、意気なところ的魅力を感じるようになった。とにかく多趣味で、コレクションの1つだつた箸袋を差し上げると、「住所が出てないのは面白くねえから」と破顔してくれたものだ。

資料館での佐川さんは、さまざまな人生と膨大な実績を感じさせなかつた。でも時折、言いたいこととはあるが黙っている、といった表情を浮かべていた。ある人の自叙伝が話題になつた時、「佐川さんは自伝、書かないんですか？」と尋ねたら「そうだなあ、いつか書きたいけどなあ。：書くこといっぱいあるから。」と言っていた。せつちかちだつたのに、それはとうとう後回しになつてしまつた。実直で、飾ることはなかつたが、実に表情豊かだつた。半ば驚き、半ば呆れたときは、独特の抑揚で「(へ)ええ」と言う。否定的な感情は、「どうしょもねえ」と嘆息混じりの声、歓待の意は「おお、おお」

と笑いを含んだ嬉しそうな声。表現力も抜群で、語り部活動で披露される、詐欺師をかばうおばあさんをめぐるシーンは圧巻だった。

保育園が休みの日に息子を連れて出勤した時も、佐川さんの笑顔と「おお、おお」の声に、心底ほっとしたものだ。人見知りかひどかった息子が、佐川さんには怯えなかった。後でお世話になったお礼をする時、「いつでも連れて来りゃあいい」との答え。年に数回、とにかく美味な焼肉をごちそうしてくれる時も、必ず「アオイくんも来れるね?」と声をかけて下さった。そちらがメイン?というほど、目をまんまるにして。

資料館にかけた佐川さんの思いは計り知れない。霞ヶ関での会議が長引いた夜も、疲れた素振りを見せなかった。「昔に比べりゃ、大したことねえ」と言っていたけれど、まるで何事もなにかのような表情で、神経痛に耐えていることもあった。

そんな佐川さんに、私たちは導かれ、守られていたのだと思う。佐川さん、淋しいです。でも、本当にありがとうございます。

田代学

資料館に勤め始めた頃、運営委員会が報告される寄贈品リストの作成が私の仕事の一つであった。寄贈された図書や各園機関誌、実物資料は、最初に佐川さんに報告される。佐川さんはノートを開き、寄贈者の名前、寄贈品、数量を記

入する。月が替わると、佐川さんは使用済みのコピー用紙の裏面に一ヶ月分の寄贈品リストを手で書き写し、私に渡す。これを私がパソコンで打ち込む。読みにくい字や誤植があれば本人に確認すればいいのだが、声をかけるタイミングにはいつも苦労した。佐川さんは資料館に来ると、講演以外は自分の机で黙々と書き物をしていて多くの職員が佐川さんに声をかけるタイミングを探っていた。仕事の中の佐川さんの周りには、独特のオーラがあった。

しかし、このような仕事一筋の固いイメージは職場の中だけであって、例えば送迎の車中では時代劇の話に熱中するなど、柔和な一面もあった。出勤時に挨拶すると、「こつ」と軽い笑みで返してくれた。佐川さんのこの時の笑顔は今でも忘れられない。

佐川さんは、弱みを他人に見せない強い人であった。自転車で転んで頭に傷を負った時があったが、周りが必死になつて勧めても、入室を拒んだ。親友である金子保志さんが急逝し、友人代表で挨拶をした時も、涙を見せずにその役目を終えた。

そんな佐川さんが、声を詰まらせて挨拶をしたのを、一度だけ見たことがある。誘致した花さき保育園の開園式の時である。多磨全生園の将来構想の一つである花さき保育園の開園は、自治会長でもあった佐川さんにとって特別な思いがあったに違いない。資料館の

「語り部」として、聴衆に向け力強く訴えるいつもの声が、この時だけは喜びを伝える涙ながらの声であった。

ある時、「田代君は園内の入所者に溶け込んでいる」と褒めていただいたことがある。この一言は、学芸員として働く私にとって大きな心の支えとなつている。この言葉に恥じないように成長していく



ことが、佐川さんへの恩返しなのかもしれない。モノを遺した佐川さんの言葉を胸に、ヒトを遺すという仕事を続けて参ります。合掌。

稲葉上道

私が採用になった時、資料館での仕事の仕方を教えて下さったのは佐川さんだった。佐川さんは、毎日現場で日常業務を担う中心

だった。来館者から質問があれば対応し、日報を書き、日々送られてくる刊行物の記録を取り、礼状を出し、入館者数を集計し、職員の出欠を記録し、寄付の記録をつけるなどしていた。その一方、語り部として来館者に話し、展示解説を行い、資料館だよりを編集・執筆し、企画展やイベントを開催していた。月に一度の運営委員会の議題も、佐川さんが用意していた。

平日の午前中、多磨全生園入所者自治会で役員として働いた後、午後になると資料館に来て仕事をしていた。資料館は週末も開館していたので、一日中休みになる日がめつたにないところぼしていたが、決して休もうとはしなかった。たゆまぬ日々の活動が、少しずつ資料館を育てることになると考えていたのだと思う。

そんな佐川さんの自慢の一つは、資料館が日本博物館協会に入会できたことだった。実際は少し違うのだが、佐川さんは、社会的に一人前の博物館と認められなければ、入会が承認されないと考えていた。だから佐川さんにとって入会は、資料館もようやく一人前の博物館として、社会に認めてもらえた証だったのだ。後から現れた学芸員には、その価値を守り、続けていくことを期待していたのだろう。

また、「人間、苦しいだけで生きてこられる訳がない。」とよく言っていた。私は、ご自身の体験から生まれた言葉だと思つて聞いていた。佐川さんはあまり口にしなかったが、本当は患者・回復者として、また在日韓国人として、酷い扱いを受けてきた。それでも生きてくるために、どれほど多くの楽しみを見つければならなかったのだろうか。

佐川さんは資料館設立に尽力した。開館後は語り部・運営委員の他、事務も担った。決して資料館を私せず、功績を誇示することもなく、地味な仕事を毎日黙々とこなす実直な実務家として、資料館を支え続けて来た。資料館にとって最大の功労者だと、私は思っている。佐川さんの資料館に対する真摯な姿勢に触れた年月は、私の人生にとって大きな財産だ。

佐川修さん

追悼イベントの

お知らせ

佐川修さんを偲び、生前、語り部として行った講演を記録した映像と、全患協運動について語ったインタビュー映像の上映会を開催します。また連休まで、ギャラリィで展示も行っています。

上映会開催日 4月15日(日)

「語り部映像」

(10時30分～11時30分)

「インタビュー映像」

(13時～15時30分・途中10分休憩あり)

場所 当館映像ホール(150席)
事前申込み不要

春季企画展

「この場所を照らすメロディ ―ハンセン病療養所の音楽活動―」

二〇一八年度春季企画展は、「この場所を照らすメロディ―ハンセン病療養所の音楽活動―」と題し、ハンセン病療養所で行われた音楽活動を紹介します。具体的には、主に戦後の活動に焦点をあて、楽団活動、カラオケ、民謡を取り上げる。

いたトロンボーンを描いた油彩画などを展示する。

【カラオケ】

一九七〇年代から八〇年代にかけて全国的にカラオケが普及していくと、カラオケを愛好する入所者が増え、各療養所にカラオケグループが誕生する。グループのメンバーたちは練習を重ねて歌に磨きをかけ、園内で盛大に発表会を開催した。カラオケが盛んだった二〇〇〇年代までは、療養所の全園交歓会や地域住民との交流も行われた。カラオケは園内外の交流を促進し、ハンセン病問題の啓発にも貢献した。

このコーナーでは、発表会などの写真、発表会の衣装、歌手デビューを果たした入所者のポスターやCD、園外のカラオケ大会で優勝したときの賞状などを展示する。

【民謡】

民謡は、昔から療養所で根強い人気を誇るジャンルだった。故郷を離れて療養所で暮らす入所者にとって、故郷を偲ぶメロディでもあった。戦後になると各療養所で民謡のグループが作られ、特に盲人たちが生きがい求めて民謡に取り組んだ。このコーナーでは、民謡が盛ん

だった松丘保養園（青森県）と東北新生園（宮城県）で使われた三味線、太鼓、尺八などとともに、星塚敬愛園（鹿児島県）の三線同好会の活動を紹介する。隔離のなかで入所者が音楽に注いだ情熱と、生きる力や慰めを与え、差別をこえて人びとを結びつける音楽の力を感じていただきたい。

【会期】 4月28日（土）～7月31日（火）

【開館時間】 午前9時～午後4時30分（入館は午後4時まで）

【休館日】 毎週月曜日（祝日の場合は開館）、国民の祝日の翌日（祝日の場合は開館）、館内整理日

【付帯事業】 決定次第、当館ホームページなどでお知らせします。



大島青松園のシルバースター楽団

ハンセン病資料館等 運営企画検討会が 開催される

2月27日（火）第17回ハンセン病資料館等運営企画検討会が、厚生労働省で開催された。

議題は国立ハンセン病資料館および重監房資料館における「平成29年度事業実施状況について」と「平成30年度におけるハンセン病問題に関する普及啓発の取組方針（案）について」であった。

昨年度末、本検討会は「ハンセン病問題に関する普及啓発の在り方について（提言）」をとりまとめ、それを受けて厚生労働省は「ハンセン病問題に関する普及啓発促進に向けて（厚生労働省としての当面の取組）」を出した。今回の会議は普及啓発に限り、今年度中の資料館の取組組みをまず構成員に確認していただき、ついで30年度における普及啓発の取組方針案と、普及啓発の中長期計画案の策定に資するご意見をいただく目途で招集された。

語り部事業の存続のために本年度から資料館で新たに始めた「ハンセン病体験講話」事業の実施状況について確認する質問が多かったが、構成員の評価は上々、今後のさらなる事業の充実に期待が寄せられた。

またハンセン病問題を風化させないためには、資料館の活動ある

いはハンセン病問題を周知させる広報活動はもちろん大事であるが、同時に広聴活動にも力を入れる必要があるという意見や、国民の意識調査を普及啓発事業の効果測定の意味も重ねて実施する必要性への言及もあった。

さらに各療養所に社会交流会館・歴史館が建設されて、学芸員が派遣されている現状に鑑み、より一層、国立のハンセン病資料館の中央館としての役割が増すため交流の促進を図るべきとか、普及啓発の取組は各地の交流会館との協力連携のもとでの実施が望ましいなどの意見も出された。他にも多くの意見・提案が得られ、厚生労働省は今回の議論を踏まえて、近く30年度の「取組方針」を公表する予定である。

